

ヒュームの記憶論

—私たちはいかにして正しい記憶を識別しうるか—

慶應義塾大学 高萩智也

はじめに

本論文は、デイヴィッド・ヒューム（1711-1776）の『人間本性論』（以下『本性論』）における「記憶（memory）」をめぐる哲学的議論、すなわち記憶論を扱う。記憶はヒュームの哲学体系において重要な位置をしめている。例えば私たちの事実判断がもとづいている因果推論は、過去の対象や出来事の恒常的接続の記憶から生じる（cf. T 1.3.6.2）。また人格の同一性も、記憶と因果推論から生じる信念である（cf. T 1.4.6.20）。したがって、ヒュームにおける記憶という能力の本性を明らかにし、それと知識との関係を示すことで、彼の記憶に関する心理学的知見や知識論の内実がより明らかとなることが見込まれる。

しかしヒュームの記憶論は伝統的に厳しく批判されてきた（cf. MacNabb 1951; Passmore 1952; Noxon 1976; Pears 1990）。それによれば、ヒュームの体系では記憶していることと想像していることを区別できないばかりか、正しい記憶を誤った記憶から識別することもできない。もしこの批判が正しいければ、記憶論のみならず、それと関連する因果推論や人格の同一性をめぐる議論が、ひいてはヒュームの知識論全体が欠陥を抱えることになる。

近年の記憶論の解釈者たちは、こうした伝統的な解釈の批判からヒュームの記憶論を擁護しようと試みている（cf. McDonough 2002; Traiger 2008; Cruz 2019）¹。しかし、彼らは伝統的な解釈の批判を捉え損ねており、したがってそれに十分に応答できていない。そこで本論文はあらためて伝統的な解釈によるヒュームの記憶論への批判を詳らかにした後で、これに答える。

あらかじめ本論文の結論を示しておく。伝統的な解釈は、記憶とは何かという記憶の本性に関するヒュームの見解だけでなく、どのようにして正しい記憶を識別するかという認識論的な問題に対するそれをも批判している。そして後者は、知覚の整合性という基準を導入することで初めて解決される。

本論文の構成を述べておく。第一節ではヒューム哲学の基本的な道具立てを説明したのち、彼の記憶論を概観する。次に第二節でヒュームの記憶論を批判する伝統的な解釈の代表としてノクソンの解釈をとりあげ、その批判の内容を紹介する。その後第三節でノクソンの解釈の批判からヒュームの記憶論を擁護しようと試みている近年の解釈をとりあげて検討し、それらがノク

ソンの批判に答えきれていないことを示す。最後に第四節で、知覚の整合性に訴えることでノクソンの批判に答える。

1. ヒュームの記憶論

1.1 ヒューム哲学の基本的な道具立て

ヒュームの記憶論の理解には、彼の哲学体系の主要概念を抑えておくことが必要だ。そこで、まずはそれらについて説明する。

ヒュームは感覚や感情、思考など、人間の心に存在する一切のものを「知覚(perception)」と呼ぶ。あらゆる知覚が「勢いと活気(force and vivacity)」という一種の現象的性質を伴っていて、これが強い知覚ほど、その内容は主体にとって明証で確実なものになる。この勢いと活気は、知覚が最初に心に入ってきたとき、つまり感官によって対象が感じられたときに最も強くなる。その知覚ののちに思考に現れるときには、勢いと活気はいくらか失せる。前者が「印象(impression)」、後者が「観念(idea)」と呼ばれる(T 1.1.1.1)。印象と観念は類似関係、因果関係(印象が観念を生み出す)、そして表象関係(観念が印象を表象する)という3つの関係に立つ(cf. T 1.1.1.2-8)。

また印象と観念の区別とは横断的に、知覚のうちには「単純(simple)」と「複雑(complex)」の区別がある。単純知覚とは、それ以上部分に分割できない知覚のことで、複雑知覚とは逆に、部分に分割できる知覚である(cf. T 1.1.1.2)。

ヒュームによれば、単純印象とそれを表象する単純観念の任意のセットの間には、正確な類似関係が存在する。例えば、パイナップルの味の単純観念は、正確にパイナップルの味の単純印象と類似していて、それを表象している(コピー原理)。しかし複雑な知覚に関しては、正確に類似する複雑印象を持たない複雑観念がある。実際に見たものを正確に再現し損なっている場合や、持ち合わせの単純印象を恣意的に組み合わせ、対応する複雑印象を持たない複雑観念(例えば全てが金でできた街)を想像する場合がこれにあたる。

以上のように整理すると、私たちは観念を通して印象を表象し、思考すると説明される。ヒュームの枠組みにおいて「記憶(memory)」は、第一義的には、この観念を生み出して印象を表象する表象作用(能力)のことである(T 1.1.3.1)²。

1.2 二つの記憶論

ヒュームの記憶論³は主に『本性論』第一巻第一部第三節「記憶と想像の観念について」と、第三部第五節「感覚と記憶の印象について」の二箇所で開催される。本論文では前者を「第一の記憶論」、後者を「第二の記憶論」と呼び、本節で二つの記憶論を順に整理する。

(1) 第一の記憶論

既に述べたとおりヒュームにとって「記憶 (memory)」は第一義的には印象を表象する能力であるから、第一の記憶論は表象能力としての記憶作用⁴の分析から始まる。

私たちは任意の印象が心に現れて、それが心に観念として再び現れる場合に、次の二つの異なった方法があることを経験から知る。すなわち、新しく現れるときに最初の活気を非常に多く保っていて、印象と観念のいくらか中間であるような場合と、活気を完全に失っていて、完全に観念であるような場合だ。最初の方法で印象を反復する作用は「記憶」と呼ばれ、もう一方は「想像力」と呼ばれる (T 1.1.3.1)

ここでヒュームは記憶を「想像力 (imagination)」という別の表象作用と対比させて論じている。印象の勢いと活気を保持したまま表象する作用が記憶、勢いと活気を失わせる作用が想像力というわけである。

ヒュームは別の特徴によっても、記憶作用と想像力を対比している。

想像力がもとの印象と同じ秩序と形態に縛られないのに対して、記憶はこの点においていわば束縛されていて、変更する力を持たない (T 1.1.3.2)

ここで、想像力は印象として経験していないことをも表象できるのに対して、記憶は経験したことのみを表象する能力として特徴づけられている。

ところで、この特徴に関連する重要な点を指摘しておく。ここでヒュームは記憶作用がもとの印象の秩序と配列（以下では単に「秩序」）を「変更する力を持たない」と述べている。ここから、もとの印象の秩序を変更された観念はすべて想像力によって表象された観念である、と思われるかもしれない。しかしそうではない。「私たちが何かを思い出す際にそこ[対象が提示されたもとの形態]からそれる場合には常に、そのことは記憶の欠陥や不完全さから生じているのは明らかだ」(T 1.1.3.3)と述べて、記憶が正常に作用し損ねることをヒュームは認めるからである。

以上が第一の記憶論である。そこでは記憶が、①もとの印象の秩序を保持しているという点と勢いと活気が強いという点で想像力と対比され、特徴づ

けられている。要するに記憶とは、もとの印象の秩序を保持し、勢いと活気の強い観念を生み出す表象作用である。

また以上から、印象を表象する観念は「真な記憶の観念」、「偽な記憶の観念」、「想像の観念」の3種類に分類されることになる。任意の観念は、まず、記憶によって生み出された「記憶の観念」と想像力によって生み出された「想像の観念」に分類され、その上で、記憶作用には失敗がありうるので、記憶の観念が、印象の秩序を保った「真な記憶の観念」と、印象の秩序を保っていない「偽な記憶の観念」に分類されるからである（これに加えて、偶然にも「もとの印象の秩序を保持した想像の観念」もあるだろう。しかしもとの印象の秩序を保持しているか否かは想像力を特徴づける性質ではないため、ここであえてそれを設けることはしない）^{5,6}。

任意の観念がどの作用によって生み出されたかということと、その観念が印象の秩序を保持しているかということは独立の事柄であるために、観念は以上の3種類に分かれることになる。それは、工場で一般に優良品を生産するレーンAと時々不良品を生産するレーンBがあるとき、ある商品が優良であるということと、その部品がしかじかのレーンから生産されたものであるということが独立であるのと同様である。

(2) 第二の記憶論

第二の記憶論では、私たちはどのような基準で任意の観念を記憶の観念とみなすか、という観念の識別の問題が論じられる⁷。ヒュームはこれに関して次のように述べている。

記憶と想像はその複雑観念の配列によっても[単純観念によって区別されないのと]ほとんど同じくらい区別されない。観念のもとの秩序と位置を保存することが記憶の固有の機能であって、想像力は好きなようにそれを移し替えたり変更したりするけれども、その相違は作用の点でそれらを区別し、一方を他方から区別するのには十分ではないからだ。なぜなら、過去の印象を現在の観念と比べて、それらの配列が正確に類似しているかどうかをみるために、過去の印象を思い出すことは不可能だからである。(中略)それゆえ、記憶と想像力の相違は記憶の優れた勢いと活気にあるということが帰結する (T 1.3.5.3; 下線部強調は引用者)

ヒュームはここで、もとの印象の秩序を確かめることは原理的に不可能であるという理由から、記憶作用と想像力を分ける基準であった印象の秩序に関する基準は、観念の識別基準にはならないと論じている。また第二の記憶論

他の箇所でも彼は「想像力は記憶が提示するのと全く同じ観念を表象することができるので、これらの能力はそれらが提示する観念の違った感じによってただ区別されるのみ」と、同様のことを述べている (T 1.3.5.4)。このことから、記憶の観念と想像の観念の識別はもっぱら観念の勢いと活気の度合いによって行われるということがわかる。

しかし以上のテキストを含め第二の記憶論からは、真な記憶の観念を偽な記憶の観念からいかにして識別すべきか、という問題に対するヒュームの答えが明らかではない。ここに解釈の余地が生じる。

2. ノクソンによる批判

以上のようなヒュームの記憶論は伝統的に厳しく批判されてきた。解釈者によって批判の方法や力点は異なっているものの、それらは概ね次のようにまとめることができる。すなわち、ヒュームの記憶論は①記憶の観念と想像の観念の識別に関しても、②真な記憶の観念と偽な記憶の観念の識別に関しても、問題含みな基準を提示している、と。本論文ではこのような批判を含む解釈の代表として Noxon (1976)を紹介し、批判の内容と射程を明らかにする⁸。

まずノクソンによれば、印象の秩序に関する基準と、勢いと活気に関する基準は、どちらも記憶の観念と想像の観念を識別するためのものである (cf. Noxon 1976, 271, 275)。その上で彼は、これらの基準が「論理的に独立」(276)であることを見落としているとヒュームを批判する。ノクソンが指摘するように、印象の秩序を保持していても勢いと活気が失われている観念や、逆に勢いと活気を保っていても印象とは秩序が異なっている観念は存在しうる。問題は、ノクソンの解釈するヒュームによればそうした観念が「記憶の観念でありかつ記憶の観念でない」ことになるという点にある。これはパラドキシカルな観念であり、この解釈が正しければ確かにヒュームは記憶の観念と想像の観念を識別するための適切な基準を提出できていないことになる。

さらにノクソンは、別な観点からもヒュームの記憶論を批判する。彼によれば、ヒュームは一方で記憶の観念を歴史記述において用いられるもの、他方で想像の観念を詩などのフィクショナルな記述において用いられるものだと考えている。しかしそれでは、「覚えていることと真な歴史的判断を下すこととの間の論理的な独立性」を認識し損なっているとノクソンは指摘する。その際彼は、ヒュームが「カエサルは 3 月 15 日に元老院で殺された」という歴史的事実の根拠を記憶だと言いながら、歴史家の書いた本に求めている

ことを批判する (cf. Noxon 1976, 278; T 1.3.4.2)。というのも、本が記憶として根拠になるならば、つくり話が記された本も記憶になりうるからである。また私たちが「カエサルは 3 月 15 日に元老院で殺された」という知識を歴史書よりもむしろシェイクスピアの本つまり物語から得る場合があるとノクソンは考えるからである。要するにノクソンの指摘は、記憶の観念ならば真な歴史的判断になるというわけでも、真な歴史的判断ならば記憶の観念であるというわけでもないということだ。ノクソンによれば、ヒュームはこれを見損なって「一方から他方が推理されうる」(1967, 279) と考えたせいで、真な記憶の観念を偽な記憶の観念から識別する基準を正しく提示できていない。

ここで二つの批判がヒュームの記憶論のどのような側面に対するものであるかを示しておきたい。第一の批判は、記憶の観念を想像の観念から識別するための基準を正しく提示できていない (内的不整合を抱えている) というのだから、「記憶とは何か」という記憶作用の本性に関するヒュームの説明に対するものである。他方で二つ目の批判は、ヒュームの記憶論では真な記憶の観念を偽な記憶の観念から識別できないというものであり、記憶作用の本性に関するヒュームの説明を批判しているだけでなく、記憶と知識との関係に関するヒュームの立場を、すなわち彼の知識論までをも批判している。したがってノクソンの批判に答えるためには、ヒュームが単に記憶作用の本性について適切な説明を与えていることを示すだけではなく、記憶と知識との関係に関してヒュームが適切な説明を与えているということを明らかにする必要がある。

以下では節を改めて、ヒュームの記憶論を擁護しようと試みている近年の解釈を紹介し、それらがノクソンによる批判からヒュームの記憶論を擁護できているかを吟味検討する。

3. 近年の諸解釈とその検討

3.1 マクドノーの解釈

McDonough (2002)は、ノクソンをはじめとした伝統的な解釈の批判からヒュームの記憶論を擁護し、それにもとづいてヒュームの人格の同一性に関する見解に関して新しい解釈を示している。その中でマクドノーは、ヒュームにおける観念を本論文と同じ3つのカテゴリーに分類した上で、この3種類の観念は一般に次の二つの仕方で区別できると論じた。

(1) [正確な記憶と不正確な記憶] vs. [単なる想像]

(2) [正確な記憶] vs. [不正確な記憶と単なる想像] (McDonough 2002, 80)

マクドノーの「正確な記憶」は本論文で言うところの「真な記憶の観念」、「不正確な記憶」は「偽な観念」である。(1)の区別では、観念が記憶と想像力のどちらによって生み出されたかによって分けられる。彼によれば勢いと活気の強さがこの基準であり、私たちはこれによって記憶の観念を想像の観念から識別する。勢いと活気は経験されるある種の現象的性質であるから、マクドノーはこれを「現象的基準」と呼ぶ。他方で(2)の区別では、観念がもとの印象を正しく表象しているか否かという基準によって分けられる。彼によれば印象の秩序を保持しているか否かがこの基準であり、これは記憶作用を存在論的に特徴づけるものだ。よってマクドノーはこれを「構成的基準」と呼ぶ (cf. 2002, 83)。マクドノーによれば、ヒュームは3種類の観念の分類に二つの方法を導入することで、それらに「二つの異なった直観的な区別」(2022, 83)があることを表現しようとしていた (ibid.)。

マクドノーのこうした解釈はノクソンの批判に答えられているだろうか。まず彼の解釈は、勢いと活気の基準と印象の秩序の保持に関する基準が、それぞれ観念の分類と識別という異なる目的のための区別基準であることを示している。そのため、ある観念が記憶の観念でありかつ同時に記憶の観念でないといったパラドキシカルな事態は生じない。マクドノーの解釈によれば、記憶作用をまさにそれたらしめている特徴は印象の秩序を保持した観念を生み出すという傾向性である。このことは、「観念のもとの秩序と位置を保存することが記憶の固有の機能」(T 1.3.5.3)であるというヒュームの第二の記憶論における主張とも整合する。

またマクドノーの解釈では、印象の秩序を保持しているという基準が真な記憶の観念を偽な記憶の観念と想像の観念から区別する構成的基準であると主張されており、これによって、「覚えていることと真な歴史的判断を下すこととの間の論理的な独立性」を認識し損なっているというノクソンの批判がヒュームの記憶論にはあたらないことが示されている。というのも記憶の観念には、偽な記憶の観念という真な歴史的判断にならない種類の観念があることが含意されているからである。

しかし他方でマクドノーの解釈は、では私たちはいかにして真な記憶の観念をその他の観念から識別するのかという問いに対して適切に答えていない。「私たちが合理的に想定できるのは、ヒュームが(雑に)(1)から(2)の区

別へと移行するにあたって、彼はもはや非内観的な基準の必要性を見いださなかったということだ」(2002, 83)と述べるにとどまっている。

マクドノーは内観的基準として勢いと活気の強さに言及しているが、それが真な記憶の観念を偽な記憶の観念と想像の観念から区別する基準だと主張することには困難が伴う。ヒュームは「教育 (education)」が理性に反する事柄を教え込む様子を、嘘を重ねることによって想像の観念を記憶の観念と取り違える様子と重ねて描写する。彼によれば、教育は何度も同じ事柄を教え込むことで、その勢いと活気が増大し、人々はそれを信じるようになる (cf. T 1.3.9.19)。またヒュームは、出来事の実験や想起が最近であればあるほどその記憶内容にはより強い勢いと活気が伴うが、それにもとづく判断は非哲学的すなわち非合理だと論じている (cf. T 1.3.13.1,2)。要するに、ある観念が真な記憶の観念であるか否かを判断するために、単にその観念に伴っている勢いと活気の度合いに頼るならば、私たちは過去の出来事についてしばしば誤った判断を下してしまうことになる。

したがってマクドノーの解釈は、少なくともノクソンの批判が誤りであることを示しているが、真な記憶の観念をその他の観念から識別するための適切な基準を提示できていない点で不十分である。

3.2 クルツの解釈

より最近では Cruz (2019)が、やはりノクソンらの伝統的な解釈による批判からヒュームの記憶論を擁護しようと試みている。クルツは、マクドノーの解釈が提示した(1) [正確な記憶と不正確な記憶] vs. [単なる想像]と(2) [正確な記憶] vs. [不正確な記憶と単なる想像] (McDonough 2002, 80) という三種類の観念についての二種類の分類方法の枠組みを受け継ぎつつ、ヒュームにおける記憶を次のように定義した。

「記憶」は、特定の心理的反応を典型的に生み出す対象の集合と、その反応を実際に伴う対象の集合との両方からなるベクトルとして定義される。ヒュームにとっては、(1)が後者の集合を規定し、(2)が前者の集合を規定する (2019, 353; 下線部強調は原文イタリック。引用者が原文の括弧記号を変更)

クルツがここで「ベクトル」と言うのは、このような定義の方法をパトナムが「意味」の意味で展開した自然種名についての理論から借りてきていることによる (Cruz 2019, 348-352; cf. Putnam 1975)。彼によれば、「パトナムが言葉の外延とステレオタイプから名辞の意味を理解した代わりに、[ヒュー

ーム]の定義はそれぞれの名辞に対する生産的集合と反応的集合を記述している」(ibid.)。パトナムの理論とヒュームの理論がクルツの論じた通りこのような仕方アナロジカルに理解できるとすれば、直前のブロック引用箇所は、次のようなことを述べていることになる。すなわち、「記憶の観念」の外延は実際には「もとの印象の秩序を保持している観念」である一方で、私たちはもとの印象の秩序を保持していない観念に対しても、その観念が「記憶の観念」が典型的に伴っているところの強い勢いと活気と同様のそれを伴っているという理由から「記憶の観念」と呼んでいる、と。これは、クルツの解釈が記憶の観念の定義としては印象の秩序を保持しているという基準をとりつつ、(真あるいは偽な)記憶の観念と想像の観念との識別方法としては勢いと活気の度合いの基準をとっていることを意味する。したがって記憶の本性に関しては、クルツの解釈もマクドノーのそれと同様に、ノクソンの批判からヒュームの記憶論を擁護することに成功していると言える。またクルツの解釈は生産的集合と反応的集合とのベクトルとして記憶を定義することで、私たちが勢いと活気の強い観念を記憶の観念だと思ってしまう心の傾向性を説明している。この点でマクドノーの解釈よりも洗練されたものになっている¹⁰。

しかし真な記憶の観念を偽なそれと想像の観念から識別する基準に関しては、マクドノーと同様にクルツも勢いと活気の度合いを採用している。なぜなら、もしクルツの自然種的な解釈が正しいのだとしたら、水が H_2O でないことがありえないのと同様に、記憶はもとの印象の秩序を保持していないことがありえない。そして「透明で無味無臭で飲むことに適しており…」というステレオタイプ的な記述を当てはめることで、ある液体が水であるかどうかを知るように、私たちは反応的集合である勢いと活気の強さを手がかりにしてある観念が記憶であると知るからである。すでにマクドノーの解釈を検討した際に述べたように、ある観念のもつ勢いと活気の度合いによってそれが真な記憶の観念であるか否かを判断するという解釈には困難が伴う。したがって、クルツの解釈もマクドノーのそれと同様に、真な記憶の観念を偽な記憶の観念や想像の観念からいかに識別するかという問題には適切に答えられていない。

4. 「真な記憶の観念」を識別する基準

では、ある観念を想像の観念でも偽な記憶の観念でもなく、真な記憶の観念であると識別するために必要な基準とは何か。第二の記憶論の次の一文が

これを示唆している。

私たちは知覚の整合性から、知覚が真であるか偽であるか、つまりは知覚が自然を正しく表象しているか、それとも感覚の単なる幻想であるのかを推論することができる (T 1.3.5.2)

ヒュームは『本性論』において、真理とは外的世界と思考内容である観念との一致であるという、いわゆる真理の対応説的な見解をとっている (cf. T 2.3.10.2; T 3.1.1.9)。そして彼はここで、その対応が知覚の整合性 (coherence) によって判断されると主張している。したがってある観念が正しく過去の出来事を表象した真な記憶の観念であるか否かは、その観念と他の知覚との整合性によって判断される¹¹。この整合性は、その観念に伴っている勢いと活気を内観することだけからは知られず、その観念と関連する複数の観念や印象と比較することで初めて知られる事柄である。これは例えば、昨夜私が酔って皿を割ったかもしれないという曖昧な記憶は、床に割れた皿の破片が見つかったり、食器棚に皿が一枚足りなかったりすれば正しい記憶と認識されるということである。

ただし一般に知覚の整合性といっても、例えば私の昨夜の記憶が今読んでいる小説の内容と整合的である必要はない。実在とみなされる知覚と整合的であることが求められる。ヒュームは因果論のなかで、実在とみなされる知覚の体系として、感覚と記憶によって獲得された知覚の体系に加えて、因果推論によって獲得された知覚の体系をあげている (cf. T 1.3.9.3,4)。したがって、ある観念が真な記憶の観念であるか否かは、その観念とこれら二つの体系に属する知覚との整合性から判断されることになる¹²。

マクドノーやクルツの解釈では、観念の真偽を判断するためには他の知覚との整合性をチェックする必要がある、という点が見落とされていた。彼らの解釈には、記憶という観念 *a* が印象 *a'* を表象するという心の作用の本性を説明すれば、真な記憶の観念を想像の観念だけでなく偽な記憶の観念からも識別できるという誤った前提が置かれていると考えられる。それは、昨夜私が酔って実際に皿を割ったかどうかは、この出来事の観念を考察すれば判断できるということを意味する。しかし知覚の整合性によって真偽を判断するというヒュームの説明によれば、これは受け入れられない。

以上をふまえて本論文はヒュームの記憶論における観念の識別の問題を次のように解釈する。すなわち、マクドノーやクルツが解釈する通り、ある観念が (真にせよ偽にせよ) 記憶の観念であるということは勢いと活気の度合いによって識別され、他方で、ある観念が真な記憶の観念であるということ

は知覚の整合性によって識別される、と。この解釈によって、ヒュームは「覚えていることと真な歴史的判断を下すこととの間の論理的な独立性」を認識し損ねたというノクソンの批判に答えた上で、真な記憶の観念の積極的な識別基準を提示したことになる。

おわりに

本論文は、ヒュームの記憶論に対するノクソンの批判が認識論的な問題提起を行っていることを指摘した上で、ヒュームの記憶論を擁護しようと試みているマクドノーやクルツの解釈はこの問題に十分に答えられていないことを明らかにした。そして、ある観念を真な記憶の観念だと判断する、つまり過去の実際の出来事を表象しているとみなすためには、その観念の勢いと活気の度合いではなく知覚の整合性に訴える必要があるという解釈を提示した。

しかし知覚の整合性という概念の内実が、記憶論を超えて、ヒュームの信念論や懐疑論などを踏まえてより明らかにされるべきである。ただしこれを論じることは本論文の問題設定を大きく超えるため、別の機会に譲ることとする。

*本論文は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123 による研究成果の一部である。的確な指摘をくださった二名の匿名の査読者と、執筆過程でとりわけ重要なコメントをくださった鶴殿憩氏、滝沢正之氏（五十音順）に感謝する。

注

(1) ヒュームの記憶論をめぐる解釈上の問題は、本論文がとりあげる記憶の観念の識別・分類の問題に限られない。例えば Azeri (2013) はヒュームの記憶論が個人主義的に解釈されてきたと批判し、その社会的な側面を取り上げている。また Costelloe (2012) はヒュームの様々な著作における歴史の概念を論じながら、それと記憶との関連にも言及している。さらに思想史的な観点から言えば、ヒュームと同時代の哲学者や思想家たちのなかには、記憶という精神の作用の本性を明らかにしようとしたものがあり、そうした文脈の中にヒュームの記憶論の位置づけることも重要である。これについては例えば Wolff (1998) が、幼少期 (childhood) と記憶の関係についてロックやコンディヤックの記憶論にも言及しつつ、ヒュームの記憶論をルソーのそれと比較している。

(2) ただしヒュームの「表象 (representation)」は現代哲学における表

象とは異なった意味であることに注意されたい。ヒュームにとって表象は、少なくとも第一義的には、印象を観念として心のうちに再現前(re-present)させる能力のことである。

(3) ヒュームの記憶論において典型とされる記憶は、「私は昨日東京駅にいた」のような自分の経験についての記憶である (cf. McDonough 2002, 73; Cruz 2019, 337-338)。

(4) 以下本論文のうちでは必要に応じて、表象作用としての「記憶」を「記憶作用」と表記する。「表象」の意味については注 2 を参照されたい。

(5) このように観念を三つのカテゴリーに分けるという解釈は、他にもマクドノーが提示している (cf. McDonough 2002)。なお、マクドノーの解釈は本論文第二節で検討する。

(6) 見間違えたものを思い出している場合などにおいて、もとの印象の秩序を正確に保持しているけれども真ではない記憶の観念を持つことがありうるだろう。ただしそれは感官の働きの不正確さに起因するものであり、記憶論を主題とした本論文ではそうした事象をひとまず脇においておくことにして、記憶作用の成否に応じて「真な記憶の観念」、「偽な記憶の観念」と呼ぶことにする。

(7) 第二の記憶論においてヒュームは議論の文脈上、「記憶の観念」ではなく「記憶の印象」と呼ぶ。これは記憶論の解釈にとって問題となるが、別の機会に論じることとする。

(8) ヒュームの記憶論を批判する伝統的な解釈には Noxon (1976) の他に、MacNabb (1951)、Passmore (1952)、Pears (1990) がある。

(9) ただし「勢いと活気」という概念と信念の正当化や知識との関連については、近年さまざまな研究が行われている。例えばローブは勢いと活気についてヒュームが「強い」や「生き生きとしている」といったことに加えて「確固とした (firm)」や「安定した (steady)」という特徴を与えていることに着目した上で、ヒュームの信念を「安定した傾向性」(Loeb 2002, 65) と捉えている。

(10) クルツ自身は、マクドノーの解釈では勢いと活気の基準による記憶の観念と印象の秩序の基準による記憶の観念が共通の外延を持つことになる、と批判し、その点でマクドノーの解釈と自身の解釈を差別化している (cf. Cruz 2019, 355)。

(11) 確かにヒュームはこの引用箇所、観念と印象の秩序の一致ではなく知覚と自然すなわち外的世界との一致を論じている。しかし彼自身が『本性論』第四部第二節「感官に関する懐疑論について」で論じるように、「大衆

は知覚と対象を混同」(T 1.4.2.14) する上、哲学者すら日常生活では大衆の意見に従う (cf. T 1.4.2.53)。引用箇所は懐疑論の文脈ではないため、印象を対象とみなしてよいと考えられる。

(12) 知覚の整合性によって真な記憶の観念を識別するという本論文の解釈は、「感官に関する懐疑論について」におけるヒュームの主張とも深く関連する。そこでヒュームは物体の連続存在に関する信念が知覚の恒常性だけでなく知覚の整合性から因果推論によって生じるという議論を展開している。整合性から抱かれたある物体の連続存在の信念は、その物体を過去に観察したという記憶と相互に確証しあうと考えられる。

参考文献

ヒュームの著作 (引用に際しては角括弧内の略号を用いる)

[T] Hume, D., [1739-40]2007, *A Treatise of Human Nature*, 2 vols., D.F. Norton and M.J. Norton (ed), Oxford: Oxford University Press.

[E] ———, [1748]1999, *An Enquiry concerning Human Understanding*, T.L. Beauchamp (ed), Oxford: Oxford University Press.

その他の文献

Azeri, S., 2013, “Hume’s Social Theory of Memory,” *The Journal of Scottish Philosophy* 11.1, 53-68.

Cruz, M., 2019, “Hume’s Dual Criteria for Memory,” *Pacific Philosophical Quarterly* 100.2, 336-358.

Costelloe, T. M. 2012, “Hume on History,” in *The Bloomsbury Companion to Hume*, A. Bailey and D. O’Brien (ed.), London: Bloomsbury, 364-376.

Loeb, L., 2002, *Stability and Justification in Hume’s Treatise*. New York: Oxford University Press.

MacNabb, D. G. C., 1951, *David Hume: his theory of knowledge and morality*. London: Hutchinson’s University Library.

McDonough, J. K., 2002, “Hume’s Account of Memory,” *British Journal for the History of Philosophy* 10. 1, 71-87.

Noxon, J., 1976, “Remembering and Imagining the Past,” *Hume: A Re-evaluation*, D. W. Livingston, and J.T. King (ed.), New York: Fordham University Press, 270-295.

Passmore, J. A., 1952, *Hume’s Intentions*. Cambridge: Cambridge

University Press.

Pears, D., 1990, *Hume's system: an examination of the first book of his Treatise*. Oxford: Oxford University Press.

Putnam, H., 1975, "The meaning of meaning," *Philosophical Papers*, 2. Cambridge: Cambridge University Press, 215-271.

Traiger, S. 2008, "Hume on Memory and Imagination," *A Companion to Hume*, E. S. Radcliffe (ed.), Malden: Blackwell, 58-71.

Wolff, L. 1998, "When I Imagine a Child: The Idea of Childhood and the Philosophy of Memory in the Enlightenment," *Eighteenth-Century Studies*, 31. 4, 377-401.